KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

Wickianaとその作者像をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 光代 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006354

関西外国語大学 研究論集 第74号（2001年8月）
Journal of Inquiry and Research, No.74 (Aug. 2001)

Wickiana とその作者像をめぐって

小 野 光 代

はじめに

“Wickiana”というのは作者 Wick の名にちなんでつけられた“本”の呼び名である。作者というよりも収集者あるいは編纂者というべきかもしれない。しかし Wick の場合あえて作者といってもよいだろう。この“本”を一言で説明するのは難しい。そこで Wickiana を取り上げた二人の研究者の論文の標題をあげてみよう。

– Die Wicksche *Sammlung* von Flugblättern und Zeitungs*nachrichten* in der Stadtbibliothek Zürich – von Ricarda Huch[1] と

– Johann Jakob Wick (1522-1588) und seine *Sammlung* von *Nachrichten* zur Zeitgeschichte – von Matthias Senn[2] である。

この両者に共通している語は Sammlung であり Nachrichiten である。Wick が様々なニュースを多様な情報源から28年間にわたって集めたものである。現代的な言い方を考えてみると“20世紀の証言”などという本の題名が思い浮かぶ。それに相当する“時代(16世紀)の証言集”である。Huch は Zeitungsnachrichten という語を使っている。この Zeitung が現代では新聞を指すため、論文の冒頭でこの語の意味を説明している。現在の新聞が政治・経済・文化・娯楽等、社会生活のほぼすべての領域をカバーするニュースや解説、論説などを集め、定期的に大量に発行される比較的安価な印刷物を指すのに対し、16世紀の Zeitung は“人々の耳目をそばだたせるような事件についての知らせ”[3] という意味であった。Huch は今日でも時折この意味で使われることがあるとしているが、現在では Zeitung = 新聞 がすっかり定着しているといってよいだろう。現代では社会的伝達（マスメディア）に対する関心が高く様々な角度から研究されており、史的研究では新聞の起源も議論され、ドイツ語圏では17世紀前半の週刊新聞が今日の新聞の始まりだとされている。Huch も現代の定期刊行物としての Zeitung(新聞) の萌芽として、17世紀前半の週刊新聞をあげている。一世紀近くも前にこの指摘をしていることは、高名な女流作家としての Huch が歴史学者としても一流であったことを示している。16世紀中

は“Neue Zeitung”として一枚印刷物(Flugblatt)の見出し語であった。Wick はこの Flugblatt をはじめとして、口頭、文書をとわず入手しうる限りのすべてのニュースや報告などを集めたのである。今後ニュースと共に情報や資料という語を使っていく。すると Wickiana は Wick の“情報集”ということになるのだが、“証言集”としたことについては作者の意図を推測しての命名である。

この論文はこの“情報集”が我々にどのような意義をもっているかを考察する一方で、その作者像を複数の研究者の記述から、探ることを目的としている。この情報集はいわば無名の存在である。今までそれほど多くの研究者に取り上げられてきたとは言い難い。また Zürich というスイスの一都市になぜヨーロッパ中から、きわめて迅速に大量の情報が集まったのかということも、現代の我々の理解を越えるものがある。Wick は30年弱の間にきわめて膨大な量の情報を集め、保存した。しかしその中に作者自身と作者の私的生活、すなわち家庭生活についての記述はほとんど含まれていない。このことは、Wickiana に関わった研究者が一致して指摘していることである。それ以外の情報はその質に関わらず、たとえ多少いかがわしい情報であっても、細大漏らさず集め、記録し、書き写し、貼り付けたのである。その対比は誰の目にも明らかである。しかし Wickiana についての新しい研究は作者に新しい角度から光を当てている。すなわち Wickiana の記述の中からではなく、Zürich の家系譜や聖職者譜を丹念に調査し、Wick の家族構成を明らかにした。この研究からヒントを得て、Wick という人物と彼の作品について新しい角度から考えたい。

I　Wickiana について

1．形態

Zürich 中央図書館の手稿本部門に保管されている16世紀後半 Zürich 大聖堂教会参事会員 Johann Jakob Wick によって集められた時代の証言、情報集 Wickiana はきわめて膨大なものである。クオート判（全紙四つ折り判）ないしはフォリオ判（全紙二つ折り判）の大型の本24巻で、ページ数は318から1034ページ、平均すると一冊が約610ページになる。一巻は通常１年間の、まれに２年間の出来事の資料を含んでいる。Wick は情報を到着順に本に記載または収録した。従ってほぼ時の経過にそう配列になっているとはいえ、この配列は、頻繁に以前の情報の繰り返しや補い、さらにはその時点の問題とは全く関係のない事柄などの割り込みなどで乱されている。この繰り返しや、きわめて多様な情報が無秩序に収録されていることから、この資料集は偶然的なものをごちゃごちゃ並べたもの、といった印象を与えかねない。また情報の形態が雑多なことも、その印象を強くしている。それらはまず筆記したもの、印刷物、口頭で伝えられたものに大別される。

a) 筆記したもの

手紙類：全体を完全にコピーしたものは少数派である、かなりのものは要点だけコピーされている。若干オリジナルの手紙があり、完全に収録されている；日々の出来事に対する内省的な、風刺的な詩や歌；故人になった有名人の墓銘碑；様々な機関や契機に関わる多数の名簿；旅の報告の全記録；州議会の議事録、ほか。

b) 印刷物

Flugblätter, Flugschriften 等。印刷物はそのまま貼り付けたり綴じ込んだりして収録されている。

ところで Flugblatt と Flugschrift には現代の独和辞書ではそれぞれビラ・ちらしとパンフレットという訳語が与えられている。しかしこの現代語訳では16世紀における Flugblatt と Flugschrift の持つ重要な役割が表現されない。この二つの文書の性格について簡潔かつ明快に説明している Fehr を引用する。「激動の宗教改革の時代印刷業者は彼らの技術を三つの方向に応用した。一つは学者のための書籍である。次に知識層のための Flugschrift である。三番目は民衆のための Flugblatt である。字の読めるものが少なかった民衆は挿し絵を大いに好んだ。そのため大量発行される民衆向けの Flugblatt には絵入りのものがほとんどだった。激しい論争がこの手段でやりとりされた。民衆を動かそうとするものは Flugblatt を利用した。この印刷物による人の心を強くとらえ、引っさらうようなスローガンなしには大衆を獲得することはできなかった。Flugblatt はこの世紀の精神的な鞭だった。そして多数の人々がこの鞭を望んでいたのだ。だからこそ時代を動かす出来事の報道者、新しいイデーの伝道者たちは競ってこの手段に訴えたのだ...」[4]。

Flugblatt は一枚の紙に印刷されたもの、あるいはそれが二つ折りにされたものである。それに対して Fehr は Flugschrift を以下のように説明している。「... Flugschrift は Flugblatt を拡大し、詳しくしたものに他ならない。日々の出来事を報道するばかりでなく、意見形成のイニシャティブをとり時代の動向に影響を与えるものであった。Flugschrift は常に一つの事柄だけを扱い、かつ読者により高度の要求をした。すなわちより主体的に事柄に関わることを求めたのだ。小さな本の性格を帯びる場合もあった...」[5]。

以上の引用から、Wick の収集の重要な部分をなすのが Flugblatt であり、Flugschrift であることは納得がいくだろう。Huch もこの本の内容を Flugbatt を中心に考察していることは先にあげた表題からも明らかである。Fehr の記述にもあるように Flugblatt は挿し絵（木版画に手で彩色したものが多い）が本質的な意味を持っていた。このほかにも Wickiana には無数の手書きによる、挿し絵がちりばめられていて、この資料集の特徴でもありかつ魅力にもなっている。色彩鮮やかに、ぎごちなく、素朴、時には粗野に描かれた絵は、記事の内容をよく補っ

ていてそれらを具体的に示すのに大いに役立っており、その数は千以上にも及ぶ。巧みに描かれた絵と並んで、素朴な筆の技巧とは無縁の絵もある。作者を同定しようという研究者の努力は報われていない。しかし Wick 自身が作画に携わっていたことは確実視されている。Flugschriften の方は数からいって500編以上、中にはかなり分厚いものもあり、Wickiana の重要な収集部分をなすばかりでなく、それ自体で、16世紀後半の驚くほど活発だった印刷活動を証するものとなっている。

以上のように Wickiana の外面的な構造を概観しただけでも、その多様性、――あるいは雑多性といってよいかもしれない――に現れているその本質的な特徴は明らかである。このことは内容においても確認される。このような多様性はこの作品全体が有する形式上の非拘束性があってこそ可能になる。Wick が作り上げたものは、当時形式が決まっていた歴史記述のジャンルには入らない。また日記体の記述があるにしても、日記とはいえない。とはいえ書簡集という表現も適切ではない。さらには絵入り年代記とすることも許されない。年代記という名称には歴史的な出来事の諸関係が、体系的にとらえられ記述されされていることが期待されるからである。Wick の本はこのような年代記のための多くの素材を含んでいる、として Senn はこの本を Wick の“Kollektaneen”（論文や詩文からの切り抜き集）と呼ぶのがもっとも適切だろうとしている。最初にこの本の内容を一言で説明するのは難しいとした理由が以上で説明されたと思う。Wick が死亡した1588年当時、この本の性質は、周囲の人々にすでに知られていた。市政に関する多くの資料がそのまま収録されているため、すべての人に無条件で公開することは、好ましくないと考えた市参事会は、彼の死後、収集物を教会の図書館へ移管し非公開とすることを決定した。そのため Wickiana は完全な状態で現在まで保存されるとともに、広く知られることもないという結果を招いた。

2．成立

Wick はなぜこの本に着手したかについて、具体的に説明しているわけではない。しかし第一巻の冒頭に“この本への手引きについての覚え書き”という短いメモが載っており、この本を書き始める契機について、多くの示唆を与えてくれる。その箇所をあげる。

「この本には次々と起こる多くの出来事が記録されております。とくに1560年“無辜の子の日”に天が燃え上がるという不思議な現象が現れ、その前後で様々な出来事が起こりました。フランスのアンリ二世の急死、1559年の Luzern 市長 Ritter の死等々であります。これら全てのことが Zürich の教会に仕える私 Johann Jakob Wick をしてこの本を書き始めさせる切っ掛けとなっております。私はとりわけ1560年から1588年までに起こったいろいろな出来事を、すべて書きとめました。読者のみなさまがこれらの話を注意深く読まれるなら、この陰鬱な時代についての感慨を深められるでありましょう。特にフランス、オ

ランダや他の国々で起こった出来事に」[6]。

ここに1560-1588年とあることからわかるように、この覚え書きは着手した年に書かれたものではない。1577年に書かれたものが、死後、死亡の年の1588年に訂正されたものである。

しかし第一巻の内容から1560年後半に、Wick が自分が生きている時代の出来事の記録と、それに関する資料の網羅的な収集を志したこと、かつ実際に着手したことが裏付けられる。さらに Wick はそれまでにも同時代史への資料の収集に関心を持っていたこと、折に触れてそれらを保存していたことは、第二巻の内容から推測される。1560年以前の古い資料が収められているからである。ところで、ここにあげられている三つの出来事は期せずして、Wick の本全体の内容によくあっていることが指摘されている[7]。Wick が生きていたのは宗教改革後のカソリック派と改革派の対立が生み出す緊張の時代であった。人々の最大の関心事は宗教であり、しかも妥協を許さないこの両派の対立であった。アンリ二世の死はフランスで迫害されているプロテスタントのユグノー派の人々の運命に関わるものと受け止められた。外国における宗教対立の状況に Wick はきわめて大きな関心を寄せていた。Wick ばかりでなく、Luther よりはるかに徹底的に宗教改革を推進した、Zwingli の Zürich に生きる全市民の関心事であった。その関心の対象の筆頭にくるのが隣国フランスのユグノー派をめぐる動向であった。

次のカソリック都市 Luzern 市長 Ritter の死はそのセンセーショナルな背景のみでなく、まさに宗教対立のスイスにおける事例の代表なのである。Lux Ritter は傭兵軍を率いて、フランスでカソリック側のユグノー派に対する戦争に参加、軍功を立てる。故郷の Luzern に帰ってからは、政治的な権力を手中にする。またフランスから年金を支給され経済的に、もっとも恵まれた境遇にあった。権力と富の両方を得た彼は Luzern に豪華な邸宅の建築を計画する。そのために各地から腕のある職人を雇い入れる。その中に石工の Lyn がいた。彼は信仰上の問題から、これを断るが、Ritter のたっての願いに負け、宗教上の問題は不問する、という約束で、仕事を引き受ける。Lyn の人柄は周囲の人々の信頼を得、はじめは全てにおいて順調に進行した。ある時、酒場で Ritter, Lyn, 司祭たちが酒を飲んでいたとき、些細なことから口論となり、Ritter は酔った勢いで Lyn の信仰をからかい始める。これが私邸でなく酒場という公開の場であったため、信仰上の問題についての風聞を市当局は見逃すことができず、Lyn を審問する。この場で Lyn が異なる信仰をもっていることが明らかになり、市当局はかれに死刑の判決を下さざるを得なくなる。これは1559年5月に執行される。Lyn の予言したように Ritter の建物は未完成に終わり、Ritter も Lyn の処刑後3日後に死亡する。これは Wickiana の記述をできるだけ簡潔に述べたものである。Ritter は現代のスイス百科事典では、職人の家から出て Luzern の最高権力者に至る生涯が記述されており、Lyn との関わりは書かれていない。また彼の始めた建築は彼の生前には完成しなかったものの、現在も残っており、彼の富をしのばせるものとなっている。当時の Flugblatt の記事がどのような性格のものであったかをうか

がうことが出来よう。

第三の事件として“燃え上がる天”という自然の異常現象が取り上げられている。これは北極光なのであるが、当時の人々にとって天に現れた異様な色彩は神の人間に対する警告以外の何ものでもなかった。Wickiana における自然の異常現象についての情報の収集は重要な領域をなしている[8]。

3．出典

Wick が情報の収集と保存に着手した1560年以降、彼の元へ途切れることなく、大量の情報が届いている。これらの情報の出典を厳密に追跡することには、あまり大きな意味はない。また不可能である場合が多い。多くの情報(Nachrichten)には一般的な表題(Nüwe zytung uß ... den 28 Merzen または Wie diser zyt hin und har ettlich häxen verbrent 等々)[9] 以外にはその出所についての記述はないからである。

口頭で伝えられたものか、文書によるものかはその文体と内容からある程度までは区別できるが、文書による場合、個人的な手紙か、印刷物か、あるいは何らかの無名の印刷物の一部かを区別することは、きわめて困難である。手紙や通信文の場合、差出人や、宛名がわかるものがあり、それらからだけでもきわめて広範囲なしかも多様なつながりから Wick のもとに情報が届いたことがわかる。しかし最も重要な情報の提供者は Wick の上司であった Heinrich Bullinger で、1575年に死亡するまでその状態は変わらなかった。Bullinger は Zwingli の後継者で Zürich 大聖堂教会の最高位の聖職者(Antistes)[10] であった。彼から Wick は実に様々な情報の提供を受けている。Bullinger が Zürich 最大の教会の最高責任者であるということは、当時のヨーロッパの宗教界、ひいては学術および政治の世界の中心人物の一人であることを意味する。なぜなら Zwingli の指導によってスイスで最も早く宗教改革を受け入れた Zürich は国内ばかりでなくヨーロッパにおける改革派の重要な拠点の一つとして、指導的な立場に立っていたからである。Bullinger からは彼の世界的な規模の私的な文通の一部ばかりでなく、公的な性格の記録文書も多数提供されている。私的な文通とはいっても、これは宛名が Heinrich Bullinger になっていることであって、内容が私的なものということを意味しない。各地から様々な報告が Antistes 個人宛に届いたことが考えられる。特に Genf（ジュネーブ）からは Calvin の後継者である Beza がフランスやオランダの情勢についての多数の通信を送ってきた。Bullinger と Beza は1551年にドイツの Baden で知り合い、それ以来活発な文通が取り交わされていた。Beza は Genf における改革派の中心的な指導者であったばかりでなく、フランスではユグノー派の指導者や王族と個人的にも知り合いであり、緊密な交流があった。従って Beza からのフランスやオランダの情勢についての情報はもっとも信頼の置けるものであった。Wick の収集の中でもフランスに関する情報が量、質ともに充実しているのは、このためである。

Beza はまた Bullinger あてに書いたばかりでなく、Zürich や Bern の説教師たち宛てに手紙を出している。もちろん Zürich の第一人者が Bullinger であることは自明のことで、彼はこれらの通信を最初の者として受け取っている。ここで宛名人と受取人の関係を16世紀のコミュニケーション状況から考えてみよう。Wick の本の中には Beza がフランスから Genf の Calvin あてに出した手紙が存在する。このことは受け取った者が、それをさらに別の人へ送ったことを意味する（ここでは Genf の Calvin から Zürich の Bullinger あて）。このような活発な手紙の交換は当時にあっては新しいニュースや情報が伝播するための重要な手段であった。これらの手紙は幾重にも書き写され、さらに多くの人々の手に渡ったのである。ニュース等ばかりでなく宗教や学術上の問題についての意見や主張も手紙で発表され広まった。当時の手紙というメディアの公開性は現代の私的な手紙とは全く異なるものであった。手紙はこのように16世紀の重要な社会的コミュニケーションの手段ではあったが、もしこの Zürich の最高位の聖職者が当時のヨーロッパの精神界で中心的な位置を占めていなかったならば、これほど多彩な相手との文通は不可能だったろうと Wickiana の研究者は指摘する。とりわけ Bullinger の文通のうちごく一部だけが収録されているにすぎないのであるから。この多彩な文通相手の一例としてユグノー派の指導者として有名なフランス王族のコンデ王子が Bullinger に個人的に書いた感謝状が Wickiana に載っていることをあげておく。発信地はスイス各地方ばかりでなくフランスやドイツ、イギリス、ポーランドなどヨーロッパ各地にわたっている。また当時のいわゆる知識層の人々がどれほど大量に手紙を書いたか、あるいは文通を交わしたか、ということも現代の我々の理解を超えるものがある。

Bulinger は手紙類のほか公的な性格の文書、市政記録に関するものや Mandate（委任状）、Urkunden（証文類）、Sendschreiben an den Rat der Stadt Zürich（市参事会への通達状）、verschiedene Flugschriften（さまざまなパンフレット）等を提供した。その際 Wick は通常〈Ad Dominum Bullingerum〉（最長老の Bullinger 殿宛）と出所を記しているが、短い文書などでは必ずしも記入しない場合もあったと考えられる。1575年に Bullinger が死亡した後は、その後継者たちが Wick の収集に熱心に協力している。また Bullinger の息子（Johannes Rudolf Bullinger）も父が Wick の収集を援助していることを知っていて、彼が説教師として働いていた Berg 地方からニュースを送ってきている。Wick 個人宛の手紙ももちろんコピーではなくオリジナルで収録されている。以上は文書による情報の出所の概略であるが、Wick は口頭で伝えられたものも記録している。

彗星の出現や天に現れた異様な色彩や形は即座に市民達によって Wick に知らされた。Wick は直ちに彼らと出かけて自分の目で確認し、その様子を詳細に書きとめた。ある時は死者の踊り（Totentanz）を目撃したという10才の少年の話をそのまま記している。その際話の内容に少しも疑念を挟まない。ヨーロッパ精神界の最高指導者や高位の人々の手紙等と並んで、

このような名もない市井の人々がもたらす、中には信憑性が危ぶまれるような話などが、Wickiana には並んで収録されているのである。このことが Wickiana の研究者たちを悩ませてきたといってよいだろう。取捨選択が全く行われていない、整理がされていないということは、現代の研究者にはネガティーブな印象しか与えないようである。この点については最後にふれる。

4．内容

Wick は情報の収集を始めるに当たって範囲を限定する基本テーマを設定しなかった。もしそうであれば自ずから情報の取捨選択と、構成的な資料配置が行われていたであろう。そうではなく、すでに繰り返し述べてきたように、入手した全ての情報をそのまま収録するという方法を採ったため、彼の本には、きわめて様々な問題についての雑多な情報が盛り込まれることになった。従ってそれぞれの問題の具体的な内容に立ち入るよりも、ここでは Wickiana 全巻の根底に流れている基本的なトーンを探るほうが現代の我々にとって有意義であるだろう。

まず全巻を概観すると、日々の出来事についての情報を政治的なものと非政治的なものの二つに大別することができる。さらに政治的な出来事に関するものをスイス国内と外国の問題に分けて考えることができる。なお16世紀のヨーロッパでは政治的な問題とは必然的に宗教上の問題であったことはいうまでもない。

A) スイス国内における政治/宗教に関わる日常的な出来事

Zürich は Zwingli の指導のもとに1523-25年に宗教改革を導入し、その後多くの都市がこれにならった。従って16世紀のスイスの都市は宗教上、改革派、カソリック派と両派の混在という３つに色分けされることになった。この状態は本質的には現在まで変わらない。スイス国内の各都市がこの色分けによって多かれ少なかれ対立関係にあったのであるから、Wickiana にはこのことに起因する様々な日常的なトラブルが記録されている。これらを理解するためにまずそれぞれに属する都市名をあげておく。

カソリックの都市：

Luzern, Uri, Schwyz, Unterwalden, Zug この五つの都市は“fünf Orte”（五都市）としてカソリック派の中でも中心的な存在であった。これらに続いて Freiburg i.Ü. Solothurn, Wallis, Abtei St. Gallen, Rottweil, Ennetberg, Vogteien等。

改革派の都市：

Zürich, Bern, Basel, Schaffhausen, Stadt St. Gallen, Biel, Mülhausen, Neuenburg, Genf。

両者混在都市：

Glarus, Appenzell, Graubunden, Toggenburg，アルプス山脈の南側の多くの地域。

例1

1586年物価騰貴で苦しんでいた Glarus から Zürich は大量の穀物をリマト河に流しているという噂が広まった。この根も葉もない噂に Zürich 市民は憤慨し、正式に Glarus 参事会へ対して抗議し、主張を通した。

例2

1582年 Zug の人々がカペラー戦(Kappeler Kriege)の古戦場 Gubel で戦死者の骨を掘り出し不敬な振る舞いに及んだこと。1531年 Kappel で Zürich はカソリック軍と戦って敗れ、Zwingli は戦死した。この敗戦は Zürich 市民に忘れることのできない傷痕を遺した。Zürich は厳重に Zug に抗議し、長い困難な交渉の末遺骨は再び Gubel に埋葬された。

例3

上記とは反対に改革派のほうが問題を起こした例である。Luzern へ向かうカソリックの聖者像を満載した荷馬車が Zürich を通過しようとしたところ、大騒ぎになり、何人かの若者が車に襲いかかり、それらを打ち壊したこと。

これらの出来事は一時は世間の注目を集めるとはいえ、日常的な事件といえるものである。次は社会的にずっと深刻な問題である。

スイスは傭兵輸出国であった。スイスのカソリック側の都市では法王やサヴォア公やスペインと結んで傭兵を出した。一方 Zürich は全16世紀を通して傭兵を出すことを禁止していたので、カソリック都市の傭兵派遣は常に憤慨の種であった。Zürichは当然フランスのユグノー派を支持していた。しかしユグノー戦争に簡単には援軍を出すことができなかった。同じ誓約同盟のスイス人がカソリック側の傭兵として戦っていることは、Zürich にとってなんといっても我慢のできないことであった。いつもは控えめな Wick もこの件に関しては時折記事の欄外に短い書き込みをすることで、憤懣の気持ちを表している。

傭兵のさらなる問題は解雇された傭兵が落ちぶれた惨めな状態で帰国し、その道徳的にも堕落した行状によっても故郷の人々の重荷になることである。失業してスイスへ帰ってきた傭兵は犯罪者になるよりほかはなかった。解雇された傭兵が別の軍隊に雇われようとしてうまく行かず、放火と殺人の罪で処刑される顛末を Wickiana は伝えているが、多くの例の一つにしかすぎない。

改革派のもう一つの中心都市は Genf である。フランスのカソリック軍に対抗して Genf を中心に Zürich、Bern は結束を固め Ewiger Bund（永遠同盟）を結成する。Zürich はこの同盟の規約に基づいて1586年に300人の軍を Genf に派遣する。Zürich が外へ軍隊を派遣するのは55年ぶりのことであると Wick はその華やかな出兵式を描写している。

グレゴール13世の改革カレンダー問題

現代のカレンダーはユリウス暦に基づいている。1582年にグレゴール13世は長年積み重なっ

て生じた10日間のずれを調整するため10月4日の後に10月15日がくるようにし、春の始まりを3月21日にした。このカレンダーはカソリック側にまず受け入れられたが、改革派の受け入れはずっと遅れた。両者が混在しているところでは様々な混乱や悲喜劇が生じた。

このように Wickiana のいたる所で宗教上の対立から生じる社会的緊張を読みとることができる。この対立はごくささいな切っ掛けで、重大な事態に発展しかねないものであった。同じ誓約同盟国（スイス）の国民として宗教上の対立を越えて和解しようという試みが行われた。Wickiana のこの箇所を Huch は心を和ませる楽しいエピソードであると述べている[11]。1585年4つの改革派の都市からスイス中央部のカソリック派の都市へ使節団が派遣された。使節団は大いに歓迎され、はじめての土地の観光もかねた旅の様子が描かれている。しかし宗教に関わる問題になると、完全に理解し合うというわけにはいかなかったようである。

翌年返礼としてカソリック都市の使節団が Zürich を訪れた。Zürich が豪華な宴会を用意する様子が詳しく報告されている。しかしこの席での使節団の演説は Zürich 市民の憤慨を買い、会談は物別れに終てしまった。

このエピソードには Huch ならずとも、誰でも感銘を受けるだろう。同じ国民であるという自覚と平和を希求する気持ちの強さに。それにも関わらず解消しない宗教上の対立に、当時の人々にとって信仰がどれほど大切であったかを改めて思い知らされるのである。

B） 外国における政治的出来事

バルテルミの夜、すなわち1572年8月23日から 24日にかけての夜、パリで旧教徒がユグノー派教徒を大量に虐殺した事件。

Ricarda Huch は Wickiana の中でもっとも充実した情報の収集としてバルトロメウスの虐殺に関するものをあげ、詳細に検討を加えている。ここでそれを紹介する余裕はないが、Wick にとって最大の関心の一つがフランスにおけるユグノー派をめぐる状況であったことは前にも書いたとおりである。しかも Bullinger のもとへは、当時にあってはもっとも信頼できる人々からきわめて速やかに情報が届いたのであった。パリで起こったこの事件についての第一報は数日を経ずして Zürich に届いていたのである。当時の人々がこの未曾有の事件にどれほど衝撃を受けたかは Wickiana からうかがうことが出来る。現代において世界の各地で多数の人々が犠牲になる自然災害や、事故が頻繁に起こっているが、バルテルミの虐殺が当時の人々に与えた衝撃の大きさは、唯一原爆投下のそれとのみ比較されうるのではないかと思われるほどである。Wick がユグノー派をめぐる状況に強い関心を持ったのは、ユグノー戦争に、改革派とカソリック派の対立がもっとも厳しく現れていたからである。個人的な感想を表すことがきわめて少ない Wick がこの問題に関しては、しばしば怒りの声を欄外に書き付けている。

フランスの次に関心が向けられたのはオランダにおける解放戦争である。ここには独立を求めてハプスブルク家と戦ったスイス国民の過去が投影されているといえよう。この二国に比べるとドイツからの情報は比較的少ない。ザクセンやプファルツにおけるカルバン派の迫害、無数の領邦国家のあり方や君侯会議や帝国会議（Fürsten- und Reichstag）あるいは皇帝の即位式についての報告等である。

イギリスについてはスイス国民はエリザベス一世女王に対して同情的だったことがうかがわれる。ポルトガル王の家系が絶え、スペインのフィリップ二世がその領土を手に入れたことも報じられている。

東からの脅威はトルコ人とロシア人であった。しかし Flugblatt に描かれたトルコ人はあくまで観念的にキリスト教にとっての最大の敵で残忍で非人間的な存在になっている。このことはヨーロッパにとってトルコ人がいかに大きな脅威であったかを示している。従って1572年レパントの海戦で西側の連合艦隊がトルコ船団に大勝した事件はキリスト教界にとって、まさにビッグニュースであった。改革派にとっても歓迎すべき勝利ではあったが、カソリックの連合軍ということで、複雑な心境にならざるを得なかった様子が Wickiana からうかがわれる。

Wickiana には重大な事件が起こるたびに情報量が急激に増えている。すでに述べたようにバルテルミの夜の虐殺事件の情報は Wickiana の中で量がもっとも多いものである。当然大きな事件がないときには情報量はずっと少なくなる。

これまでに Wickiana に載っている、日々起こる時事的、政治的なニュースを概観してきたが、これらの情報が、様々な国や地域から、しかもきわめて遠方からも Zürich へ送られてきていることに驚かざるを得ない。当時のコミュニケーション手段が不便でかつ信頼性に乏しかったことを考えると、この情報集中力の高さは注目に値する。Wickiana に収録されたために、残っているこれらの情報の大きさこそ、Zürich が16世紀ヨーロッパの精神的な中心としての役割を果たしていたことを証拠立てるものに他ならない。それはもちろん Bullinger の世界的な規模の交際関係とその膨大な文通、当時最大級、のおかげであることは疑いない。

C) 非政治的情報

Wickiana には今日の新聞の社会面あるいは第三面に載るような事柄の記事が充満している。すなわち庶民の日常生活で起こる事件の数々である。

Wick によって収録されたテーマは当時の平均的人間が特にどのようなことに驚き、なにを大切に思っていたかを現代の我々に伝える、文化史的に貴重な資料といえる。

まず“事故と犯罪”という見出しのもとにくるような記事である。Wickiana は殺人、暴力沙汰、盗みや強盗、河川や湖、海などにおける船の難破、橋の崩壊、失恋からの自殺等々の記事で溢れている。センセーションを追いかけることにおいては、16世紀の人間も現代の人と変

わらない。これらの事故や事件は率直な筆遣いで、細部に至るまで描写され、派手な彩色の挿し絵が添えられていることも少なくない。外観のところで述べたように多数の挿し絵は稚拙ではあっても、事柄を生き生きと読者の眼前に表出させるのに役立ち、Wickiana の大きな魅力になっている。ところで、Senn はこれらの記事と挿し絵は、確かに世人の好奇心を満足させるものではあったが、Wick にとってはそれだけが最終目的だったのではない、と指摘する[12]。むしろ Wick と同時代人が生きている“この陰鬱な時代”を人々に認識させること、後世の人にとってもその“証言”となることを彼は目指した、というのである。そしてこの“陰鬱な時代”とそれを指摘する Wick の“道徳観”こそ Wickiana に通底する基本トーンだとする。この指摘は私にとって新鮮かつ鋭いものであるように思える。16世紀を近世から近代へかけての激動の時代と、簡単に位置づけてきたが、その中で生きているごく普通の人々がどのように感じていたか、などとは考えてみたこともなかったからである。Wickiana には同じような事柄が飽きもせず繰り返されている。このことについても、Senn は Wick にとって報道のオリジナル性よりも、時代の証言となるための、証拠としての完全性が重要だった、のだとする[13]。これらの災厄や人間の堕落を描き出す Wick は彼の道徳観で全ての因果関係を明快に説明する。そこに近代人の疑義逡巡はみられない。このことは“悪”の捉え方にはっきり現れている。この世の悪は“悪魔”として実在する。その具体的な存在を少しも疑わない。これは Wick だけではない。16世紀の人々が、しかも最高の知性と教養を持った人々さえも、悪魔の存在に対していかなる疑念もいだかなかったことこそ、現代の我々にとって不可解なことはない。しかし悪魔が普遍的に存在し、いつ人間に襲いかからぬとも限らないものであることを当時の人々が固く信じていた、ということを理解することによってのみ、近世の魔女狩りの本質が見えてくるのである。この世の悪行は悪魔によって引き起こされる。それを具体的に示す絵が Wickiana に二度登場する。殺人を犯そうとしている人間の耳元でふいごでその悪事を吹き込んでいる悪魔の姿である。これは犯罪の責任を人間から他へ転嫁する事でもある。この世から悪を根絶やしにするためには、悪魔を排除しなければならない。すなわち悪魔にとりつかれたものを徹底的に排除しなければならないのである。魔女は悪魔と結託して人間に様々な災厄をもたらすものと考えられた。従ってこの排除に斟酌の余地はなかった。カソリックの地域ばかりでなく改革派の地域においても魔女の迫害と処刑は無批判に当然のこととして行われた。その集団異常心理は多くの女性を犠牲にした。このテーマは Wickiana に繰り返し登場し、恐怖を呼び起こすような明確さで、魔女迫害がどれほど広まっていたかを明らかにしている。

犯罪者すなわち悪魔にとりつかれた者の様々な残虐な処刑の様子も繰り返し Wickiana に登場している。法制史家の Fehr はこれらの図を編纂し、詳しく解説している[14]。処刑が公開で行われたことは、もちろん恐ろしい処刑が犯罪に走ろうとする人間を威嚇して思いとどまらせる効果が期待されたからである。しかし実際にどれほど威嚇の効果があったかは、全くわから

ない、と彼はいう[15]。公開処刑のもっと本質的な意義は別のところにある、すなわち処刑は犯罪者を人間の共同体から完全に排除することを意味する。それが完全に行われるためには、共同体に属する人間の立ち会いが欠かせないのである[16]。

次から次へと魔女や犯罪者の処刑の図は Wick に奇妙な好みの人間とかサデスティックな傾向がある、等という評価をもたらしたが、これは現実の世界を直視させ、人間が悪魔から身を守るためには、真のキリスト者としての生活を送らなければならないという Wick の道徳的な基本姿勢を見逃しているからだといわざるを得ないだろう。

次にふれなければならないのは自然の異常現象である。Wickiana には実に多くの自然災害や天災、あるいは異常気象の話が載っている。自然災害は全ての人間に、老若男女、善人悪人の区別なく襲いかかり破滅させる。因果関係で説明のつく人間関係の場合と違って、当時の人々にとってより不気味に思われた。Wick はこれらを神の怒りの現れととらえ、この“印”によって人間を矯正しようとしているのだ、と述べている。以下の文には彼の道徳観がよく現れている。

「かかることは、神が我々をよき生活へと導くための、警告であり、鞭であり、罰なのであります」[17]。

「私はかかることを神の怒りと見なします。もしそれらの原因がほかにあるとしたら、それは我々人間に他なりません。人間は傲慢で、神を蔑ろにし、恩知らずであり、頭のおかしな、ねたみ深く、不機嫌な存在で、まるで理性のない動物のように生きているのです。神よこの悪天候がさらなる災厄の前触れでないよう、われわれをお守りください」[18]。

災厄はさらに大きな災難の前触れである。終末論的気分のなかに Wick と同時代の人々は生きていたといえよう。異様な動物、見慣れない鳥、奇妙な魚、奇形児の誕生なども Flugblatt でセンセーショナルに報じられた。その一方で、学者や画家による精密で正確な写生図が描かれた。しかしその場合でも解釈となると宗教的なものに終わり、非科学的なものにとどまった。

16世紀後半ヨーロッパで広範囲にわたって北極光が観測された。その色や形態は様々に解釈され Wickiana を彩っている。もちろん神の警告、ないしは災厄の前触れと解釈された。また自然における異常現象を一般的な悪い時代の前兆とするのみでなく、具体的な個々の出来事の前触れとしてもとらえようとした。たとえば1560年の北極光はこの年の前後に起こったさまざまな事件の予告と考えられ、1570年の未知の鳥の一群は一年後の Zürich 近辺の厳しい寒波の、1571年一月 Chur でみられた二重太陽の現象は1574、1576年の Chur の大火の前兆とされるなど、ごく一部の例である。これらが時間を遡って解釈されることなど、当時の人々は少しも意に介しなかった。人々の奇跡を信じる気持ちの強さは揺るぎないものであった。世情は不安に

満ちており、人々は将来はどうなるか大いに知りたがったのである。

5．目的

24巻もの大冊、材料の多様さとそれを引き立てている無数の挿し絵、30年近くに及ぶ、倦むことのない収集とそのための労力と費用の支出、いったい何のためであったのだろうか。その目的についてはWickは詳しくは語っていない。我々はまた彼が収集が本業ではなく、大聖堂教会の第二位の位置にある聖職者として、きわめて多忙な役職に就いていたことも忘れてはならない。序文の一節〈Unnd so der laser die flyßig besicht, so wirdt er sich größlich verwunderen ab der Trübseligen zyth.〉[19] だけでは彼の目的を知るには十分ではないだろう。

収集の目的についてSennの論考を手がかりに考えてみたい。SennはWickの生存中に彼の本を借り出して読んだ友人や知人からの、感想を述べた手紙や収集の継続を励ます手紙などを検討して、我々を納得させる結論を出しているからである。

この本は単に喜びや楽しみのためにのみ、ましてや浅薄なセンセーショナルな好奇心を満足させるために読まれるべきでなく、この本を読んだことで反省の切っ掛けが与えられることを意図している。殺人事件、魔女の火刑、天に現れた恐ろしい形や異様な奇形児の誕生等が記録されているのは、読者をぞっとさせるためでは決してなく、あるいはもっと用心深く言うなら、そのためだけではない。すでに述べたようにこれらは、人間が変わり、よりよい生活を送るようにとの、神の警告として、真剣に受け止められるべきものなのだ。神学者であったWickにとってこの道徳的、教育的効果の中に彼の収集の最大の目的があったことは疑いない[20]。

Ⅱ　Wickの人物像について

既に述べたように作者は“本”の中で自身については全く語っていない。当然本の内容からその作者の人物像を作り出すことになる。この本を開いてまず目につくのは魔女の火あぶりをはじめとして、様々な残虐きわまりない処刑の場面の図が繰り返し現れることである。その他にも悪魔の姿や異様な形態の動物、奇形児、異常自然現象等々、また人災、天災を問わず様々な災害や事故、殺人の現場の情景等々の絵で溢れている。これらを熱心に収集したのは、このようなものに嗜好をもっていたからだ、と誰しも結論づけたくなる。

初期の研究者から彼に与えられた修飾語をあげてみよう：abergläublichen grämlichen（迷信深い、気むずかしい）[21]、ein merkwurdiger Mann（変人）[22]、der eigenartige Kauz（変わり者）[23]den allem Anschein nach etwas sadistisch veranlagten Chorherrn Johann Jacob Wick（…サディスティックな傾向のある…）[24] Des Sammlers Eigentümlichkeiten war（この収集家の特異性…）[25] 等々である。Ricarda Huchは人間観察の鋭い作家として別の印象をこの作者

に抱いた。「内省的な思索に耽り、同時代人のばかばかしい振る舞いや矛盾に満ちた行動をユーモアを交えたほほえみを浮かべながら、観察し、書きとめた人物...」[26]。そして彼を奇妙な人物ではなく、まさに同時代人の一人としてとらえている。Huch は Wick が Antistes 候補のリストに載った際の推薦文から、彼が自己の職務にたいへん熱心であったこと、病人や死の床にある人を心から慰めたこと、などを見い出している。彼が本の中で自身の家庭生活に関することについては全く語っていないことから、以下のようにむしろプラスの評価を下している。「... 宗教改革時代の改革派の説教師の大部分は Wick のようであったに違いない。自分たちの信仰が善であることに揺るぎない確信を持つ一方で、対立する側の信仰に対してきわめて素朴に憎しみを抱き、そしてきわめて誠実に世俗的な事柄からは身を引いていた...」[27]。それを裏付けているのが Senn である。彼は18世紀の Zürich の系図学関係史料を調査し、Wick が三度結婚し、9人の子供に恵まれたことを明らかにした[28]。Wickiana については上記で述べたが、他人のもたらす情報は徹底的に、網羅的に集めたにも関わらず、自己に関しては結婚、子供の誕生といった“大事件”にも一言もふれなかったのである。現代人であれば自己という個人も社会を構成しており、自己に関することも社会的情報の中に入れるのではなかろうか。また情報を取捨選択せず、入手順に収録した、ということについても、現代では別の解釈が可能である。もしそれが徹底して行われるならば、情報収集の方法の一つであることが認められるからである[29]。改革派の拠点都市 Zürich の大聖堂教会の Antistes を補佐する Archidiakon は決して閑職などではなく、Antistes ほどではなくとも激職であったにちがいない。ちなみに Bullinger は膨大な著作を遺している。しかし時代の証言となる情報の収集には手が回らず、Wick に任せ、強力に支持したのである。Wick が30年弱にわたって資料収集を続けることができたのも、ひとえに、到着順の収録を徹底的に行ったためと考えられるのである。

文献

1. Dejung, E. u. Wahrmann, W. (hg): Zürcher Pfarrerbuch 1519-1952. Zürich 1953.
2. Fehr, H.: Das Recht im Bilde. Erlenbach-Zürich 1923. [Fehr 1]
3. Fehr, H.: Massenkunst im 16. Jahrhundert. Flugblätter aus der Sammlung Wickiana. Berlin 1924. [Fehr 2]
4. Fritz, H.: Verzeichnis beobachteter Polarlichter, zusammengestellt von H. Fritz. Wien 1873.
5. Huch, R.: Die Wicksche Sammlung von Flugblättern und Zeitungsnachrichten aus dem 16. Jahrhundert in der Stadtbibliothek Zürich. In: 9. Bd. der gesammelten Werke. Köln/ Berlin 1966-. S. 262-304.
6. Musch, W. u. Geßler, E. A.: Die Schweizer Bilderchroniken des 15./16. Jahrhunderts. Zürich 1941.
7. Rudolf, F.: Der Briefwechsel zwischen H. Bullinger und vier Zürcher Studenten in der Fremde 1540/42. Zürcher Taschenbuch 1943.
8. Senn, M.: J. J. Wick (1522-1588) und seine Sammlung von Nachrichten zur Zeitgeschichte. Zürich 1974.

9. Stauber, E.: Aberglauben und Sagen im Kanton Zürich. 128. Neujahrsblatt hg. von der Hülfsgesellschaft in Zürich auf das Jahr 1928.
10. Sonderegger, Albert: Mißgeburten und Wundergestalten in Einblattdrucken und Handzeichnungen des 16. Jhts.. Zürcher medizingeschichtliche Abhandlungen, Band XII. Zürich 1927.
11. Weber, B.: Erschröckliche und warhafftige Wunderzeichen 1543-1586 (Faksimile). Wunderzeichen und Winkeldrucker (Kommentar). Dietikon-Zürich 1972.
12. Weisz, L.: Die politische Erziehung im alten Zürich. Zürich 1940.
13. Wick, J. J.: Die Wickiana. hg. von. Matthias Senn. Zürich Raggi 1975.
14. Wick, J. J.: Sammlung von Nachrichten zur Zeitgeschichte, 1560-1588. Zentralbibliothek Zürich. F 12-35.
15. Zemp, J.: Die schweizerischen Bilderchroniken und ihre Architektur-Darstellungen. Zürich 1897.

注

1）文献 5.
2）文献 8.
3）Huch S. 263.
4）Fehr 2 S. 3.
5）Fehr 2 S. 3.
6）文献14. F 12. fol. I.
7）Senn S. 40.
8）文献 4 参照。
9）〈... 発3月28日のニュース、最近各地で魔女が火刑に処された次第〉。
10）Antistes 最高位の神官を表すこの語は、スイスの改革派の都市で最大の教会の最高位者の役職名として用いられた。その次に位置するのが Archidiakon である。
11）Huch S. 285.
12）Senn S. 75.
13）Senn S. 66.
14）Fehr 1 S. 5.
15）Fehr 2 S. 32 ff.
16）Senn S. 70.
17）Wick F 19 fol. 127a. zitiert von Senn S. 71.
18）Wick F 20 fol. 295a. zitiert von Senn S. 71.
19）覚え書きの訳参照。
20）Senn S. 76.
21）Zemp S. 165.
22）Fehr 2 S. 22ff.
23）Fehr 2 S. 5.
24）Weisz S. 78.
25）Musch und Geßler S.193.
26）Huch S. 267.
27）Huch S. 266.
28）Senn S. 32.
29）野口悠紀夫『超整理法』中公新書　1993.